
ヴェアリアス・アームズ

シェイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴェアリアス・アームズ

【Nコード】

N6942B

【作者名】

シェイド

【あらすじ】

魔族と人間との抗争を描いたファンタジー。

浮遊大陸

浮遊大陸、ゼネマン。それが有する広大な面積の内、西方で三割程を占める荒れ果てた広野。樹木もまばらなその土地では、大陸の面積にそぐわない、小さな戦いが繰り広げられていた。

聳え立つ岩山。その麓周辺に数名いる兵士の中で最も軽装備の男、アスレイ・ヴィンシャーは、後方にいる最も重装備の男に足音強くなる、叫んだ。

「ガスク隊長、これ以上は無理だ。一旦退避の命を出せ！」

櫛も通さないであろう、ぼさぼさのセミショート。鷹の顔を丸く整えたような顔つきに宿る印象的な蒼い瞳、襟の尖ったシャツに緩いズボン。その風体は年よりもいくつかわく見えた。

ずしり、とした重量感のある皮製の手甲を右手で取り払いつつ、アスレイは鎧が立っているようにも見える、目の前の初老の男を見入った。

「ふん、アスレイか。ならん、このまま進攻しろ」

ウィパーパーを少し格好良くしたような顔をしているガスクは、白い髭を指でなぞりながら、厳格な顔でアスレイに鋭い視線をやった。

「おいおい、正気かよ。ガスク隊長、あんたは仲間を殺す気か？」

目標はゴーレム十数体、こっちは二等格が五人。どう考えたって不利だろうが！

アスレイは、元々のつり目をさらに吊り上げ、その手に携えた鈍く輝く長剣を砕けんばかりの力で握り、激昂した。

アスレイの周辺で岩壁を頼張るゴーレム。それは岩を起源とする魔法生物の総称、岩でできたその体は体長約二メートルから三メートル、しばしば街へ降りては建物を喰らっていく、厄介な魔物である。二等格、とはアスレイの属する自治組織、『GG』内での等級のこと。五等格から一等格までと、それ以上は独自の等級が存在し

ている。

「仲間を死なせん為に、わざわざお前を含めた隊列編成にしたのだ。お前ならこの程度、ものの数ではないだろう。問題あるまい、怪物潰しのアスレイ・ヴィンシャーよ」

ガスクはその目に有らん限りの嘲笑を込め、□元を醜く歪めた。「てめえ、まだあのことを言ってるのか！ いい加減にしろ！」

怪物潰し、その言葉にアスレイは頭から溶岩が体に巡る感覚を覚えた。そして、音が鳴り響きそうなほど歯を噛み締めた。未だ、にやついているガスクに斬りかかりたかった。

「何にせよ、ゴーレムの十や二十、お前なら苦にもなるまい。さっさと行け」

ガスクは鋼で固められた左腕を水平に大きく振り、隊列に戻るよう促す。□元は真一文字に結ぶも、目に宿る嘲笑はそのままに。

「……ガスク、いつかてめえを顎で使ってやる。覚悟しとけ、残り少ない髪の毛を絶やしてやるよ」

目線をわずかに上にずらし、アスレイは憤怒と侮蔑が入り交じった表情を見せた。

「くつ、とつとと行け！ あと、防具ぐらい整えろ！」

顔を朱色に変え、ガスクは捨て台詞を吐いた。

「はっ、お断りだ！」

アスレイは腹部に巻いて使う装備を腰元に巻いて垂らしていた。動きが取りにくいから、という理由からだ。アスレイはほとんど装備品をつけない、つけるのは規定にある最低限のものだけで、それもちちゃんと身につけず、動きやすさ重視で自分なりに装備している。チョーカーやペンダントなどの装飾品も身につけるがために、周囲から異端視されているが本人はまるで気にしていなかった。

アスレイは外していた手甲を付け直すと、踵を返し、暴れているゴーレムの元へ走った。この腹立たしさはやつらにぶつけよう、アスレイは思った。だが同時に、俺は愚かな八つ当たりをしようとしているのではないか、とも思った。何故だか酷く気分が悪くなった

が、足を止めようとは思わなかった。

アスレイは自らの愚かしさを剣に込め、振るう。もそももそり、と胸の皮一枚、奥のところでうごめく腹立たしさは到底、消えそうになかった。

フォーベ

静寂、それと荒い息遣いだけが、それぞれ独立して聞こえた。

「はあっ、終わった。……ふう」

アスレイは剣を地面に突き立て、その場に腰を下ろす。

明日は立ち上がることもできないかもな、アスレイは腕の痛みを感じつつ、わずかに斜めに立つ剣を横目にうなだれた。

アスレイが武器としていたる長剣は、通称、バルエ。二等格以上の兵に配給される規定の武具の一つで、ゼネマンに存在する魔石と呼ばれる特殊な鉱石を用いて製造する。その製造方法は、クリエイターなる職人が魔石を溶かし、武具の素材に混ぜて精製し生成するといふものだ。クリエイターはG G内でも極少数で、民間では数えるほどしかない。

「ちっ、ガスクに上手く使われたな。気に入らねえ」

何か仕返しができないものか、そんなことを考えながら、先程突き立てた剣を杖代わりに立ち上がる。

「ガスクというのは、この方ですか？」

瞬間、真後ろから突然の声、アスレイは驚き、思わず飛び離れた。体を反転させ、身構えつつ声の主を見据える。

声の主は深紅の長髪と鋭く尖った耳を持ち、魔族を思わせる姿だった。だが、それよりも遥かに強く目を引くのは、その手に握っているモノだった。

「……ガスク、か？」

魔族のような男は、ガスクを手に使っていた。しかし、ガスクの胴体は存在せず、無言の重圧を放つ、無残な一つの物体となっていた。アスレイの目の前で血がぼとぼと、幾度となく地面に吸い込まれていく。

アスレイは恐怖に慄いた。全身の肌がぴりぴりと迸る。つい、先刻まで俺と口論してたやつが。信じられない、その思いが体中を何

周も何周も、巡った。

「なるほどやはり、この方がガスク。貴方の復讐の手間が省けて良かったですね。おっと、自己紹介が遅れました、私はフォーベ・クラウンと申します」

フォーベは薄笑いを浮かべ、ガスクの頭を無造作に放り投げた。そして身に付けていたマントで軽く、血を拭う。

この男、フォーベは正気の沙汰ではない、アスレイは悟った。そして、フォーベの強さも理解した。目の前にただ立っているだけで威圧感に押し潰されそうになる、この感覚はアスレイの脳にはいまだかつて無かった。

「どうしました、顔色が優れないようですが」

フォーベはゆっくりとアスレイに歩み寄り、冷たい手でそっと、アスレイの頬に触れた。

触れられた瞬間から、アスレイは息を吸うことができなくなる。

単なるプレッシャー、たったそれだけに、息が詰まった。

「は、なせ」

ようやく、僅かばかり声を絞り出せた。

「おっと、失礼しました」冷たい手を、アスレイの頬から離す。「で、一つ、お聞きしたいのですが、この辺りのゴーレムを倒したのは誰ですか？」

「知らない、何のことだ」

ゴーレムを倒したのは俺だ、などと言えるはずもない。顎を震わせながら白を切り通すのみだ。

「ふむ、嘘はいけませんねえ。私の可愛いゴーレムの残骸近くにいた兵士、無関係とは思えない。」フォーベは拳を握り締めた。自らの握力に負け、拳から血が滴る。「それに、兵士さんは私が怒りのあまり、殺してしまったのですよ。貴方を除いては、ね」

フォーベの顔が引きつる。手を拳から手刀の形に変え、腕を振り上げた。

死、死を受け入れた。アスレイの脳がそうした。それ以外に、対

処が浮かばないから。目は閉じなかった、閉じられなかった。フォーベの指先が眼前に迫る。走馬燈が頭の中を回る、一歳、三歳、これは四歳か。もう忘れかけていたことまで、鮮明に甦る。いよいよ、現在に辿り着こうかというとき、フォーベの指先が弾け飛んだ。そしてアスレイの記憶も、弾けた。

フィアス

「目が覚めたか？」

アスレイが目を開くと、そこは白が目立つ医務室だった。

「俺は……？」

——言葉が出ない。さっきまで地獄にいるような感覚だったのが、夢であるはずはない、だが俺は生きている。どういうことだ？

「……混乱しているようだな。無理もない。あのフォーベの圧に晒されたのだからな」

ベッドの横の丸椅子に足組をして座っている男が諭すように話す。

「フォーベ、……あいつは、何なんだ？」

フォーベの眼光と冷たい手を思い出す。アスレイは背中にドライアイスでも当てられたような寒気を感じた。

「あいつか。あの男、フォーベは魔族の混血。GGの敵対組織、通称、M・Sの上級組員だ。聡明だが、かなり凶暴な奴で、特等格も何人が殺されてる」

男は不意に、悲しそうな顔を見せる。

「……あんたは？」

少しの沈黙を切って、ぶっきらぼうにアスレイは男の名前を聞いた。

「私か、私はフィアス。フィアス・ウィンド。一応、お前の上司に

当たる者だ」

フィアスは上着の内にある、金色に輝く階級証をちらつかせる。

「アポロン？」

一瞬見えた見慣れない言葉を、アスレイは思わず声に出した。

「ん？ お前、まさか階級号を知らないのか？」

「いや、聞いたことはあるな。俺の二等、とかのことだろ、確か、いや、多分」

アスレイは目を上に向けながら、読点多く、若干自信無さ気に説明する。

「確かに二等格や一等格も階級号の一つだ。では、その上は知っているか？」

逆立つ黒い短髪をいじりつつ、フィアスは問い掛ける。

「さっき言ってた、えっと、特等格？」

アスレイは首を傾げ、そのあと、傍にあったタオルで寝汗を拭いた。

「そう、特等格。一等格以上は、それぞれ一つ、階級名を授かる。私の場合、アポロンという訳だ」

微笑を浮かべているフィアスはもう一度、階級証を見せる。

「ふうん、二等格の俺にはまだ関係ねえかな」

フィアスの動作が突然、止まった。

「……ところが、そうでもない。君は既に、二等格ではないからな」

パツと顔を上げ、意地悪く小さな笑みを現す。

「昇格だよ、特等格にな。これがお前の階級証だ」

上着の内ポケットから、鈍く輝くバッジをアスレイに手渡した。

が、不味い木の実をかじったシマリスのような顔で、アスレイは手渡されたバッジをその手から溢した。

「は？ いや、は？」

「こらこら、大事な階級証を落とすな。今からお前はこのバッジ通り、ケイローンの号を背負うのだからな」

ベッドから転がり落ち、床にあったバッジを拾い上げまた、アスレイの手に戻した。

「な、何でそうなるんだよ。俺は何もしてないだろ！」

「ああ、何の功績も上げていないな。だが偶然、私と出逢った。私に言わせれば、小さな偶然こそ運命。最も、信じるべきものだ。」

小さな笑みを絶やすことなく、フィアスは椅子から立ち上がり、出入口に向かう。

「いや、理由になってねえだろ！ けど、偶然でも何でも昇格できるってんなら甘んじて受けてやるよ」

フィアスの背中を睨み付けつつ、強がりの台詞を吐く。

「……甘んじて受ける、か。その言葉、忘れるなよ。また明日、この時間に来る」

フィアスが扉を閉めた瞬間、アスレイは体に重い何かを背負っているように感じたが、毛布を被り、それは疲労なのだと思い込んで、少しだけ眠ることにした。

キングカウ

翌日、アスレイはフィアスの執務室に呼び出された。

「よく来たな。まあ掛ける」

明らかに必要な物以外を排除してある部屋に、アスレイは居心地の悪さを感じた。

「で？ 修行でも施してくれるのかよ」

些か柔らかすぎるソファに浅く腰掛けたアスレイの瞳は、らららんと輝いていた。

「馬鹿を言うな、そんな暇が私にあるものか。暫くは私の任務遂行の補佐を務めてもらうぞ」

への字口と眼力でアスレイを制する。額のバンドで眉も隠れているためか、威圧感がある。

「ちっ、わかったよ」

アスレイは口をとんがらせ、不満の意を提示した。

「その代わり、これをやろう」担いでいた筒を手渡す。

「ケイローンの短弓だ。お前専用のバル工だよ」

「短弓って。矢はないのか？」

素早く弓を取り出してまじまじと眺める。それは三十センチ程の小さな弓だった。

「矢など必要無い。弦を引けば出てくる。お前の精神力を糧にしてな」

「ふうん。俺は弓嫌いなんだけどな」

弦をピイン、と弾きアスレイは一つ息を吐いた。

フィアスはアスレイのその仕草を見ず、立ち上がる。

「そういうな。その辺のバルエに比ぶれば、威力は比類無いものだぞ」

アスレイに背を向け、自分の長弓を担ぐ。

「出立だ。アスレイ、着いてこい」

「へいへい、わかったよ」 渋々、といった様子でアスレイは立ち上がった。

同日、日の落ちかけた夕刻に、二人は目的地にたどり着いた。

「はあ、疲れた。こんなだだっ広い森に何があるんだよ」

ゼネマン南方に広がる森林地帯。深くまで潜り込まない限り、大した危険も無いこの場所に二人は足を踏み入れていた。

「最近、魔獣に依る被害が増えているらしくてな。それも、キングカウの亜種がこの浅い位置に出没するらしい」

キングカウ、それは王牛とも呼ばれ、人間の何倍もの体躯を持つ肉食の牛だ。一般人が襲われれば、命は無い。

「キングカウだって！ ランクAの特指魔獣じゃねえか。森のこんな浅い場所に出るはずねえよ」

信じられない、といった面持ちで、アスレイは声を荒げる。

「あまり大きな声を出すな。余計な獣まで相手にしなければならなくなる」

フィアスは小声でアスレイを諭し、屈んで地面の土を凝視した。
「近いな。アスレイ、気を張れ。もう相手はこちらを見つけているやもしれん」 アポロンの長弓を握り、フィアスは構えを取る。異様な空気を感じ、無言でアスレイも追うように構えた。

数分、時が流れただろう。木の葉の擦れる音だけが聞こえた。

「来ないな。フィアス、本当にいるのか？」

「ばっ！ アスレイ、後ろだ！」

アスレイが弓の弦を手から離れた瞬間、死角から極大の毛玉が弾丸の如く飛んできた。

アスレイには、振り返る間すらなかった。が、フィアスはそうではない。最悪、アスレイごと撃ち抜く危険性もあったが、フィアスには相応の覚悟もあり、アスレイにもあるものとした。

小さな破裂音とともに、キングカウの奇声が響く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6942b/>

ヴェアリアス・アームズ

2010年10月28日04時58分発行